遊星惑星源流考* (2)

Etymological Cons'derations of "Planet."*

井本進 *Susumu Imoto*

以上概觀する處，遊星の方が惑星よりも，優勢であると云ひ得るであらう．

"遊星" "惑星" 以外に，同じ西洋の planet の意味を表はす言葉があるが其の主なるものは "行星" と "緯星" とである．此の外，古來木火土金水の五遊星を五星又は "五緯" と云ひ，之に日月を加へ "七曜" とも云つて居る．更に計都と羅睺の二つを加へて "九曜" とも呼んだのであつた．七曜は又 "七星" 或は "七政" とも云つたのである．羣書拾唾には "七曜亦七政と曰ふ" と載つて居るが，"七政" は漢書天文志や史記天官書にも見えて居て，非常に古い言葉である．"七曜" も後漢書劉陶傳に出て居るが，"陶は書數十萬言を著し，又七曜論を作る" と載つて居る．此の "七政" "七曜" と同樣に，"五星" と云ふ文字も古いのであつて，前漢書藝文志には "顓頊五星曆十四卷" "自古五星宿紀三十卷" "傳周五星行度三十九卷" など，五星に關する天文書の名が見えて居る．又 "五星東井に聚る" などの句は有名である．史記天官書にも "天に五星あり，地に五行有り" と出て居るが，甚だ古いものである．次に，之等遊星惑星の異名別名の中，行星と緯星とに關し暫く考證して見ることゝしよう．

先づ "行星" と云ふのは，支那の比較的近代の書物に載つて居る文字であるが，之はあの John Herschel の "Outline of Astronomy" の支那譯なる "談天" と云ふ書に，planet の譯語として載つて居るのである．因に談天は咸豐己未の年卽ち安政六年 (1859) に支那で刊行された書物である．之より後，日本に於ても "行星" と云ふ文字が用ひられることゝなり明治四年に出た "博物新編" と云ふ書物は素より，明治五年に書かれた "理學初步圖解"，更に又，明治十二年鈴木義宗の編輯になる "天文學" にも同じ年尾崎三良により書かれた "文學自在" と云ふ書にも "行星" と云ふ字が採用されて居る．又，明治十六年，丸善商社から出版された "百科全書" も矢張り "行星" と云ふ文字を用ひて居る．そして此の行星と云ふ文字は其の以後は見受けられなくなつた．

次に，"緯星" であるが，之れ又遊星，惑星と同樣左程歷史は古くはなく，寬政三年 (1791) 高井晒我が著した "訓蒙天地辯" に初まつて居るやうだ．そしてあの長崎の通詞志筑忠雄が寬政十年 (1798) John Keil の天文書を譯したと云ふ "歷象新書" にも，鶴峯戊申(しげのぶ)が文政四年 (1821) に書いた "天の御柱" にも，矢張り緯星と云ふ文字を採用して居る．猶，元祿七年 (1694) 貝原好古

*東亞天文協會紀要 O. A. A. Memoirs, No. 77.

が編輯した和爾雅には“五緯”と云ふ文字が載つて居るが，其後，安政二年(1855)に澁川景佑が書いた“暦引圖編”にも五緯と云ふ文字が見えて居る．五緯は，讀んで字の通り，五つの緯星と云ふ意味であつて，緯星は經星に對する言葉であるが，機で織物を織る時に緯糸と經糸とがある樣に，古來星も之と同樣，經星と云つて經糸と同じく二十八宿の如き動かない星があるのに對し緯糸の如く經星を縫つて動いて行く星がある，夫れを緯星と云つたものである．

淳祐七年(1247)，東嘉王致遠が蘇州の孔子廟内に建てたと云ふ南宋の黄裳の天文圖にも“緯星は五行之精にして，木を歲星と曰ひ，火を熒惑と曰ひ，土を塡星と曰ひ，金を太白と曰ひ，水を辰星と曰ふ．日月を併せて，之を七政と謂ふ”と見えて居る．從つて，緯星と云ふ文字も行星と同じく，支那から渡來したものなのである．因に，現今支那で用ひられて居るのは上に述べた“行星”と云ふ文字である．

此の外，佐藤信淵は天保十三年(1842)刊行の其著“鎔造化育論”の中で特別の用語として“運星”と云ふ字を使用し，内運星と外運星とに分けて居るが，蓋し之は同氏の發明に係るものであらう．特殊のものとして附記する．

大體，上に述べた處で本篇“遊星惑星源流考”を終ることゝするが，京都の渡邊敏夫氏も，本問題を取扱つた一文を草して居られるとのことであるが，此の機會に拜見したいものである．本木良永の“天地二球用法記”に，惑星の文字が載つて居ることについては，同氏の教示を得たことを茲に併記する．

(昭和16年12月5日稿)

遊星惑星源流考資料一覽表

遊星	游星	惑星	行星	緯星	著者名	著作又ハ發刊年
		太原本術星 窮理了解陽 新制天地二球用法記 天文要訣		南宋淳祐天文圖	黄裳	淳祐 7(1247)
					本木良永	安永 3(1774)
					——	安永頃？
				訓蒙天地辨	高井哂我	寛政 3(1791)
				大塊類集全書	海老澤光居	寛政 7(1795)
				暦象新書	志筑忠雄	寛政10(1798)
		刻白爾天文圖解			司馬江漢	文化 6(1809)
				天の御柱	鶴峯戊申	文政 4(1821)
	遠西觀象圖說				吉雄常三	文政 6(1823)
	泰西三才正蒙				永井士訓	嘉永 3(1850)
			天談		李善蘭譯	咸豐己未(1859)

遊星	游星	惑星	行星	緯星	著者名	著作又ハ發刊年
		星學初步			金澤學校	明治 4(1871)
		星學圖說			神田孟恪譯	明治 4(1871)
			博物新編		鹿兒島縣	明治 4(1871)
			理學初步圖解		——	明治 5(1872)
	窮理智環		窮理智環		清原 道彥	— 此書ニハ游星ト行星ト兩樣載テ居ル
		天文錦の緒			吉良 儀風	明治 6(1873)
		星學捷徑			文部省	明治 7(1874)
天文初步					久島惇德譯	明治 8(1875)
	物理問答				永峰 秀樹抄譯	明治 8(1875)
	物理階梯				片山 淳吉	明治 9(1876)
			文學自在		尾崎 三良	明治12(1879)
			天文學		鈴木義宗編	明治12(1879)
洛氏天文學					文部省	明治12(1879)
			百科全書		丸善商社	明治16(1883)
		佛國眞天談第一編			渡邊 龍潭	明治18(1885)
挿畫 天象地球略解					增山 守正	明治20(1887)
初等教育小天文學					澁江 保	明治24(1891)
普通天文學					敬業社	明治26(1893)
地球之過去及ヒ未來					横山又次郎	明治30(1897)
自然界の現象					三澤力太郎	明治33(1900)
天文學一夕話					村上春太郎	明治35(1902)
		天文讀本			河西 璞	明治36(1903)
			索星指針		水路部	明治37(1904)
		高等天文學			一戸 直藏	明治39(1906)
天文學叢話					横山又次郎	明治41(1908)
		雜誌 天文月報			日本天文學會	明治41(1908)
宇宙					三宅雄二郎	明治41(1908)
		朝夕の理學界			野口 秀敏	明治44(1911)
宇宙進化論					新城 新藏	大正 5(1916)
雜誌 天界					天文同好會現東亞天文協會	大正 9(1920)
標準天文讀本					山本 一清	昭和 2(1927)

(註) 上記ハ筆者所藏ノ天文書ニヨリ代表的ノモノヽミヲ摘錄セシニ止マル.